5 月 14 日のメッセージ

聖書：ルカによる福音書　7：　1 – 10

「ひと言おっしゃってください」

2010 年 4 月 15 日(木)、ポレポレ東中野で『アメリカ –戦争する国の人びと』という映画を見ました。全 8 部、494 分(8 時間 14 分)もある大作ドキュメンタリー。戦場から帰ってきた人々のインタビューが大半を占めたのですが、最後に「それぞれの春」と題されたエピソードがありました。

前段までの、傷ついた、傷つけられた人々が、少しずつ前を向いて歩き始める姿に安心したのと対照的な、また新たに戦場へと送り出されていく若者たちの姿がそこにありました。

アメリカ海兵隊のブートキャンプ(新兵訓練)では、「イエス・サー」以外の言葉はありません。普通の若者が、命令一つで人を殺すマシンへと作り変えられていきます。その時、今日の百人隊長の言葉が浮かびました。

「わたしも権威の下に置かれている者ですが、わたしの下には兵隊がおり、一人に『行け』と言えば行きますし、他の一人に『来い』と言えば来ます。また部下に『これをしろ』と言えば、そのとおりにします。」(ルカによる福音書 7:8)

軍隊における一言の重さを肌で感じた瞬間でした。

「キリスト教は御利益宗教ではない」と言いながら、どこかで何かを求めてしまうのもまた現実でしょう。癒しの場面、救出の場面は、聖書を読む私たちの心を打ちます。願わくは、自分にも同じことが起こってほしい。これも偽りなき信仰者の願いです。

そして聖書は、真摯に神に向き合い、神に従い続ける者に必ず報いてくださる神の姿を伝え続けています(「神様が天使を送って獅子の口を閉ざしてくださいましたので、わたしはなんの危害も受けませんでした。神様に対するわたしの無実が認められたのです。」ダニエル書 6:23)。

神の思いに応えようとする者の祈りを、願いを聞いてくださる方だと伝えています(「しかし、主は真実な方です。必ずあなたがたを強め、悪い者から守ってくださいます。」テサロニケの信徒への手紙二 3:3)。

主の恵みの奥深さを知り、主に全てを委ねることの強さ、大切さを伝えているのです(「味わい、見よ、主の恵み深さを。いかに幸いなことか、御もとに身を寄せる人は。」詩編 34:9)。

異邦人である百人隊長は、確かに救われるにふさわしい人物だったと言えるでしょう(「あの方は、そうしていただくのにふさわしい人です。わたしたちユダヤ人を愛して、……」ルカによる福音書 7:4-5)。

しかし、イエスはその働きに、その手の業に応えられたのではありません。百人隊長の中にある、真に神を思い、真に神と向き合う姿勢に目をとめられたのです。

神が発する言葉には限りない力があります(「神は言われた。『光あれ。』こうして、光があった。」創世記 1:3)。言葉の力を、権威の力を確かに知るからこそ、百人隊長は神の前にへりくだります(「百人隊長は友達を使いにやって言わせた。『主よ、御足労には及びません。わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。ですから、わたしの方からお伺いするのさえふさわしくないと思いました。」ルカによる福音書 7:6-7)。

「ひと言おっしゃってください。」(ルカによる福音書 7:7)

たった一言で十分なのです。いや、もしかしたら、言葉さえ必要ないのかもしれません。神の力に全てを委ねる者にとって、「ただ神がおられる」ということが最大の救いであり、最大の喜びなのですから。

悪い意味での絶対服従、マシンのような服従ではなく、神に自由にされた一人として、これからも神の言葉に聞き、従い続けたい。決意を新たにする一週間として参りましょう。